

# コイコエ。1

*H i m e & T a k a y u k i*

---

伽月る一こ

*Ruko Kazaki*

termity



エタニティ文庫

## 第一話 声から始まる「恋」はありますか？

『ぶつさいくなお前に、その名前はお似合いだよ。——醜いイワナガヒメ』  
幼なじみからの悪意ある侮蔑の目は、イワナガヒメの名前と共にずっと心に刻み込まれたままだ。

「石長比売」とは、古事記に登場する女神のことで、彼女は父によって、花のように美しい妹女神「木花之佐久夜毘売」と共に男のもとへ嫁がされる。しかし、その醜い容姿から、石長比売だけが実家に送り帰されるという惨めな結末を迎えてしまう。

——また、か。

幼いころ刻まれた醜い女神の名前を思い出しながら、奇しくも「イワナガヒメ」と同じ名前を持つ岩永ひめは、惨めな気持ちでいっぱいになった。

ここは、美しい日本庭園を臨む高級料亭の一室。窓の外では、おあつらえむきといわんばかりにししおどしが涼やかな音を立てており、い草の香りたちこめる室内ではお見合いが執り行われていた。

ひめの目の前にはふたりの男性が並んでいる。ひとりひめを見ただけで固まった見合い相手。そしてその隣に座る付添人は、眉間に皺を寄せて手元の写真とひめを交互に見ていた。その様子から悪い予感がしたひめは、隣で愛想笑いを浮かべている母を横目で睨む。

「だって、ねえ。この子の写真をお渡ししたら、絶対にお会いしていただけないと思って」それが実の娘について思うことか、とひめは悔しさに奥歯を軋ませた。母の言葉によって斬りつけられた心の傷が、じんじんと痛みだす。その痛みを耐えるように、ひめは「大丈夫だから泣くな」と心の中で自分に言い聞かせると、顔に笑みを貼り付けた。

「おふたりの様子と、母の言葉から察するに、釣書の写真が私ではないようにお見受けします。失礼を承知で申し上げますが、確認のため写真を見てもよろしいでしょうか？」

釣書とは、お見合いをする前に交換する「履歴書」のようなもので、そこには自分だけでなく簡単な家族の経歴も含まれている。そして添付するお見合い写真は、まさに大事な釣り餌だ。その写真がひめ本人のものでないとしたら、相手の行動も領ける。だから、ひめは写真の確認を願い出た。写真を見た先方の態度がおかしくなつたのは、これが初めてじゃないからだ。

付添人は一瞬だけ訝しげに眉を寄せたが、漆塗りの机の上に写真を置いた。

「ありがとうございます」

逆さに差し出された写真を覗き込んだひめは、写真の人物を確認するなり、これで一体何度目だと心の中で嘆息した。ひめは付添人へ写真を戻し厚手の座布団から降りると、前に両手を揃えて深々と頭を下げる。着物の帯が邪魔をして苦しいが、できるだけ額を畳に近づけた。

「申し訳ございません。釣書の写真は、私の妹で人妻です」

ざわり。空気が変わったのが、頭を下げていてもわかる。

そりゃそうだ。相手はひめの妹の写真を見て会おうとしていたのだから。そこで写真とは違う人間が現れば頭にもくる。しかも、——写真より明らかに見劣りのする、否、明らかな醜女であれば、なおさら怒り心頭というもの。

「母に代わり、私、岩永ひめが頭を下げさせていただきます。どうか、ここは私に免じて、ご容赦ください。ご不快な思いをさせてしまい、本当に申し訳ございません」

実の母が、何度も長女の見合いを次女の写真で釣るなんて、情けなくて涙が滲む。

両親がひめを結婚させたいと思う情熱は買う。妹が先に結婚して、姉であるひめが結婚せずに家にいることを、両親は体裁が悪いとしているくらいがあった。だからといって見合いのたびに妹の写真で釣るのはどうかと思う。ひめは度重なる写真の差し替えについて「こんなことをしたら二度とお見合いはしない」と母に釘を刺していたのに、また

もやこんな目にあってしまった。

もちろん、自分みたいなブサイクが結婚したいなんて、あつかましい夢を持つほうが悪い。「ひめ」という名前と容姿が、月とすっぽん以上にかげ離れているのはひめ自身よく理解していた。

天然パーマでまとまらない髪の毛は常にまとめてアップ。顔には万年「大人ニキビ」があり、つやつやたまご肌なんて夢のまた夢だ。眼鏡をかけ、自信のなさから、ほとんど下を向いているため、周りには暗くて地味な印象しか与えない。プロポーションだつてぽっちゃり体型。その上老け顔で、実年齢の二十六歳に見られたことが一度もない。おまけに趣味は漫画やアニメです、なんて言った日には、相手の男性が顔を引きつらせて逃げていくありさまだ。

それに比べて妹の咲耶こそ「ひめ」と呼ばれるのにふさわしかった。

くりくりの茶色い瞳に、ぷっくりとした艶やかな唇。ひめとは違いストレートな黒髪が「女」を際立たせる。細いところは細く、出ているところは出ている女性的な身体。これで性格もかわいいのだから完璧だ。おかげで、ひめと咲耶は常に比べられていた。

先生や友人、会社の同僚、実の両親に至るまで。——妹と云えば、みんな妹を好きになる。だから、こんな自分なんて誰も好きになつてくれるわけがない。

ああ、悔しい。きつと顔を上げたら、彼らは侮蔑の視線を浴びせてくるだろう。もし

くは、この間のように「馬鹿にされた」と言つて何か物を投げつけてくるかもしれない。

ひめは泣きだしそうになる気持ちをぐつとこらえて、頭を上げた。しかし、予想に反して見合い相手の表情は穏やかなもので、逆にこちらが呆気にとられる。そこでひめは、相手の釣書がないまま今日を迎えたことを今さらながらに思い出し、相手の顔を眺めた。

さらさらな黒髪は男性とは思えないほど艶やかで、少し長い前髪からのぞいたつぶらな瞳は澄んでいる。特別カッコいいわけでもなければ、カッコ悪いわけでもない。普通の、女性にモテるとは思えない、冴えない印象を与える男性だった。

「あなたが岩永ひめさんですか？」

——その瞬間、彼の声に全神経が奪われた。

初めて聞いたその声で、突然無音の世界に放り出されたような感覚に陥る。あれほど耳についていたしおどしの音すら聞こえない。

「初めまして。佐倉鷹之と申します」

先ほどよりすっかり鷹之の声を聞いたひめは、この声に既視感を覚えた。

「あ、の……」

「はい?」

すんなり耳に入ってきたのは、低く響く男性特有の声。けれど、そこには自然と他者を従わせる「音」が含まれていて——彼の声に従いたくなる衝動に駆られる。もっと、もっと、とさらに聞きたくなるような、そんな麻葉のような声だった。

これは、この、コエ、は。

ひめは自分の直感を信じるように、質問を口にした。

「お、お仕事、は……?」

「声の仕事を、少々」

それを聞いて、さらに動悸が激しくなる。声の仕事でひめが知っている職業はひとつしかない。もし、それがひめの知っている職業であれば、小説や漫画の中でしか起こらないことが、今、現実にも目の前で起ころうとしていることになる。

ひめは緊張をほぐすために、こくり、と唾を呑み込むと鷹之を見つめた。

もっとこの「声」を聞いていたい。この「声」に名前を呼んでもらいたい。そんな欲求が心の底から湧き出る。

「あの、ひめさん……?」

困惑した鷹之の声で、ひめは我に返った。そこでようやく周りの音がひめの耳に届く

ようになる。

「な、なんでもありません」

ひめは顔を真っ赤にして居住まいを正すと、再び厚手の座布団の上に正座した。

本来ならば、怒鳴られても軽蔑されても仕方のないことをしているのに、鷹之の落ち着いた対応にひめの緊張が少しほぐれる。視線が合うとにっこり微笑んでくれる鷹之に、感謝を伝えようとひめも微笑む。が、すぐに騙だましていた自分の立場を思い出してうつむいてしまった。

「僕の顔に何か……?」

しまった。相手の顔を見た後で視線を落とすなんて失礼な真似をしました。自分を悔なげいる。

「ごめんなさい！ あ、あの、写真の件でご不快になっているんじゃないかと思って、つい……」

そう言って弁解したひめに、彼は「ああ、なるほど」と納得した様子で微笑んだ。

「大丈夫です。僕は怒ってませんよ」

「え?」

「むしろ、僕の顔が嫌であなたが顔を逸そらしていたらどうしようかと思いました」

「それはありません!!」

思わず大きな声で叫んだひめに、鷹之は一瞬目を見開いてから、「光栄です」

と、にっこり。

向かって右頬に片えくぼをのぞかせる。そのかわいい笑顔に、ひめは心臓をわしづかみにされた。

「それでは、続けましょうか」

ともすると、聞き逃してしまいそうな口調で、さらりと鷹之は言葉が続ける。

「えっ!？」

慌てて自分の口を手で覆うと、隣にいる母から命令ともとれるスキンシップ——余計なことは言うな、と膝をぐっと掴まれた。思わず母を横目で見ると、当の本人は何食わぬ顔で正面を向いている。ひめは、心の中で嘆息を漏らして、不思議そうに自分を見ている鷹之に視線を戻した。

「なんでもありません」

ひめの取り繕った笑顔を見た鷹之はにっこり微笑み、手にした湯呑みに口をつける。

ひめもそれにならない、ぬるくなったお茶をそっと口に含む。ちらりと鷹之を見ながら、ひめは今までのお見合いの結末を思い浮かべた。今までは、釣書の写真差し替えで相手が激怒し、強制的にお見合いが終了になるパターンしかなかった。いくら怒っていない

とはいえ、写真の差し替えについて何かしらの反応を示してもいいはずだ。それなのに、彼は今ひめの前でお茶を飲んでいる。

どうして何食わぬ顔でこのお見合いを続けられるのだろうか？

そんなことを考えながらひめが湯呑みを置くと、鷹之から名前を呼ばれた。

「ひめさん」

「は、はい」

「お庭。出ましょうか」

「へ？」

え。あの、それよりも、——本当に、このまま「お見合い」続けていいんですか？

そう胸中で確認するが、誰ひとりとしてひめの気持ちを受け渡してくれる者はいなかった。付添人であるふたりは平然とお茶を啜っている。そして、目の前の鷹之は邪気のない笑顔を見せてくれるのだから、ひめは鷹之の申し出を快く受け入れるほかなかった。

「はい、どうぞ」

ししおどしの音が響く中、先につっかけを履いて庭に降りた鷹之から手を差し出される。

あまりにも自然に差し出された手を見て、ひめは驚きで顔を上げた。自分の容姿が気

になって男性と親しくしたことがないため、ひめはこの手の紳士的な態度をとられたことがまったく嫌いだ。そのため、どうすることもできずに、ひめはじつと鷹之の顔を見た。「どうかしましたか？」

「私……だ、男性から……、こ、こんなふうにされたことがないもので……」

「ああ、恥ずかしい？」

「いえ、そ、そういうわけじゃ——」

ふわり、自分の身体が宙に浮く。驚きの声もあげられずにいると、腰を掴んだ鷹之がひめをつっかけの上を下ろしてくれた。

「はい、どうぞ」

ひめは目の前で微笑んでいる鷹之に惚けてしまい、その場を動くことができなかった。触れることをためらわず、軽々と身体を持ち上げた彼の優しさに、ひめは卒倒しそうになるほどの嬉しさを覚える。

「あ、あり、ありがとう、……、ごさいます……」

かろうじてお礼だけ述べると、視線を鷹之から足元に落としてつっかけを履く。

その間も、鷹之はひめの身体を支えるように腰に手を添えてくれた。まるで抱きしめられているような感覚にドキドキして、つっかけを履くの思った以上に手間取った。

それでも文句を言わずに待っていてくれた鷹之は、ひめの手を取って歩き出す。ひめは、

繋いだ手から心臓の音が伝わってしまいうんじゃないかと不安になった。

部屋の縁側から園庭に出ると、暖かな太陽の光に包まれる。

この店は、高層ビルの最上階に位置していた。美しい日本庭園がビル風で荒れないようガラスで囲み、温度調節もされているせいか、庭園というよりは温室に近い。ガラス越しに見える都会の風景に、まるで空を飛んでいるような気分させられる。

しばらく歩くと、日本庭園の中央にある人工の川のほとりに着く。なんとなく手を離すのがもったいなくて、ひめは繋いだ手をそのままにしていた。ふと見下ろした川の中では鮮やかな色をした立派な鯉が二匹、寄り添いながら気持ち良さそうに泳いでいる。その水面には上空の雲が映りこみ、空を自由に飛んでいるようにも見えた。

「気持ち良さそう……」

自然と呟いてしまうほどに、仲良く泳ぐ鯉からは「自由」を感じた。

「そうですね」

ひめの言葉に彼が同意を示してくれたことが嬉しくて、口元がほころぶ。

「ひめさん」

「は、はい」

「本当だったら僕がリードするべきなんでしょうけど、僕お見合いは今回が初めてで……。その、恥ずかしい話、実は緊張してます」

苦笑しながら、ひめの頬に手のひらを当てる鷹之を見上げて、ひめは耳まで赤くなった。「だから、ひめさんから話題をいただけると、大変助かります」

チャンスだ。今なら、鷹之に確認したいことが聞けるかもしれない。

「あ、あの……っ。……その……」

しかし、ひめは鷹之の顔を見ていると、その一步をなかなか踏み出すことができなかつた。違っていたらどうしよう。嫌われてしまったらどうしよう、そんな不安が大きくなる。それが表情に出ていたのか、鷹之は、気遣うように微笑んでくれた。

「そんなに緊張しないで、聞きたいことがあったらなんでも聞いてください」

とはいえ、彼の顔を見る勇氣はない。ひめはうつむいたまま、最初に声を聞いてから気になっていたことを口にした。

「さ、佐倉さんって……、声優な、ん……、です、か……?」

繋いでいる手が、ぴくり、と動く。

彼の手からそつと力が抜けるのを感じたひめは、無意識のうちに彼の手を握り締めていた。

「あのっ。私、……わ、私……っ」

握り締めた鷹之の手を自分の胸元までもっていくと、それを両手で包み込む。

「素敵だと、思いますっ!!」

その一言をきっかけに、ひめは夢中になって思いつくまま言葉を口にした。

「私、佐倉さんのシリウスが好きです! 原作の『Omit』が大好きで、書籍も全巻購入しました! アニメも見えます、ゲームも持っています。最初は自分の想像しているキャラクターに命が吹き込まれることに対して抵抗がありました。でも、佐倉さんのシリウスは違いました! イメージどおりました!」

彼が声をあてている『シリウス』というキャラクターはアニメ化されたオンライン小説に出てくる登場人物の名前だ。彼は自分の身分を隠して隣国の王子の護衛をしている。自らも国を失った王子という立場なのに、異世界に召還された女子高生である主人公を助けていくという役柄だった。この話は、そんな女子高生の主人公が、自分の運命を知り、切り拓いていく異世界召喚ファンタジーだ。

「だ、だから、あの……すごく、すごく……素敵だと思います!!」

鷹之の手をぎゅうつと握りこんで、振り絞るように言葉を紡ぐ。返事はない。一瞬の静寂が、ふたりを包んだ。——それを破ったのは掠れた声。

「それは、シリウスをやってる僕が? それとも、声優の仕事が?」

切なさの滲む声に、ひめは思わず顔を上げた。表情は先ほどと変わらず穏やかなのに、どういうわけか「声」だけが寂しさを訴えているような気がした。

自分も、その寂しさには覚えがある。



「どちらでもありません。私が素敵って言ったのは、あなたの仕事を含めた佐倉鷹之さんです。だって、どれかひとつでも欠けてしまつたら、それはあなたじゃないでしょう？」  
 風が吹いているわけでもないのに、風にさらされていような気分になる。真意を測るような瞳で鷹之に見つめられて、ひめはぼつりぼつりと自分の闇を晒していた。

なんとなく、そう、なんとなくだけれど、彼も「自分に迷子」な気がして。

「佐倉さん。私、……名前負け、してませんか？」

自嘲気味に笑つたひめを見て、鷹之は眉を顰めた。それはひめの言葉に対する否定の意味なのか、そうじゃないのかわからない。けれど、直感的に「優しい人だな」と思った。

「この容姿と名前で、私に向けられる視線は痛いものばかりでした」

いつだって、名前と容姿がイコールじゃない、というだけで、落胆の視線を向けられる。「かわいい妹と比較されながら生きてきた私は、ブサイクな自分なんか結婚できるわけないってずっと思っていました。男性と恋愛することもできないんだろうな……。私、自分の恋を諦めてたんです」

「……」

「オンライン小説にはまったのは、そんなときでした。小説だけじゃなく、アニメや漫画の世界は、こんな私にも、夢を与えてくれます。恋ができない臆病な私でも、ヒロインのように愛される気持ちを疑似体験できます。大好きなシリウスを通して、佐倉さ

んの声が、私に恋愛のときめきを教えてくれたんです。だから、私は素敵なお仕事だと思いません」

「仕事、だけ、ですか……?」

「え?」

「先ほど、あなたは僕の仕事を含めて、僕が素敵だとおっしゃいました。今のは仕事だけ、ですよ? では、僕は? 僕が声優じゃなかったら、ひめさんは僕に見向きもしませんでしたか?」

——私が「ひめ」じゃなかったら、みんな私のことをみてくれる?」

過去の自分と、鷹之がだぶって見えた。

確かに自分は存在しているのに「自分がいない」感覚。彼から感じた寂しさは、やはり以前ひめが持っていたものと同種のものだと、実感する。

「実は私、今日、佐倉さんの声を聞くまで、あなたが声優だってことを知りませんでした」  
 そう言って笑うと、彼はきょとんとした顔を見せる。

「あなたの声を聞いてもしゃ、とは思いましたけど、声優とか関係ないんです。私は純粹に、佐倉鷹之さんに興味を持ちました」

「興味……、ですか」

「お見合い、続けてくれましたよね？」

「それだけ？」

目を丸くした鷹之に、ひめは笑顔で頷いた。

「私にしてみれば、十分な理由です」

「……」

「私もフィルター越しに品定めされてきた人間です。だから、……佐倉さんのお気持ち、なんとなくわかります」

ひめは両手で彼の手を握り締めたまま、ぺこりと頭を下げる。

「今日は、お見合い続けてくださってありがとうございます。このことは誰にも言いません。……佐倉さんからお姫様扱いしてもらえて、お見合い続けてもらえて、すごく嬉しかったです」

もう二度と触れることはない、と思いつながら、自分のぬくもりで温かくなった彼の手を離すと、ひめは先ほどよりも深く頭を下げた。

涙が出そうになるほど幸せな時間だった。

怒られて当然のことをしたのに、お見合いを初めて続けてくれた人。恋ができないと諦めていたときに、救ってくれた声優の人。

一生に一度、お姫様扱いされてみたい、と思った夢を一瞬でも叶えてくれた人。

この容姿を見て侮蔑の視線を向けずに、微笑んでくれた優しい人。

ここで別れるのは寂しいし切ないけれど、住んでいる世界が違う人。

私は彼にとって不相応だ。少ししか一緒にいなかっただけけれど、それがとてもよくわかった。

だから、ここで「終わり」。いや、始まったものだから終わりですらない。一度お見合いをした、ただそれだけの関係だ。

「幸せな時間をありがとうございました。このお見合い、私からお断りさせていただきますね」

それだけ言うと、ひめは頭を上げて踵を返した。

そんなひめの背中を見送った鷹之は、先ほどまで握られていた自分の手を見下ろし、ぐっと握り締めると、スーツの内ポケットに入れていた携帯電話を取り出した。

ひめは、夢のような時間を与えてくれた鷹之に感謝しながら、もと来た道に戻っていた。その間、ゲームでしか体験したことのない甘やかな時間を思い出し、それを肌で感じることでできた幸せを噛み締める。自然と緩む頬をそのままに、ひめは軽やかな足取りで母の待つ部屋へと戻った。

しかし、襖すまを開けても母や鷹之の付添人の姿はなく、机の上に一枚の紙切れだけが置いてある。ひめは嫌な予感がしつつも、机の上にある紙切れを手に取った。

「こんいんとどけ」

自分の目に狂いがなければ、「婚姻届」という文字が書かれている。

ついでに言えば、

「判が……、お、お、押されてる……っ!？」

しかもサインまで!？」

握る手に力を入れると、ぐしゃり、と紙が悲鳴をあげた。

ひめは、すでに記入された両家のサインを眺めながら、力が抜けたように机の前で座りこむ。一体どうしてこうなったのか。困乱した頭では冷静に考えることができなくて、ひめは思考の海に溺れていく。——そのため、背後が完全にお留守になっていた。

「ああ、逃げられてしまいましたね」

「ひいひいっ!!」

背後からの声に驚いたひめは、手元の婚姻届を勢いよく握りつぶす。

「なんでもありません! 私、何も知りませんから!!」

握りつぶした婚姻届を近くに置いてあったハンドバッグにねじこむと、ひめはそのままだ立ち上がって、くるりと振り返る。そこには、襖に寄りかかるように立っている鷹之

がいた。

「あの、それでは失礼します。さようなら」

そう言って鷹之の横を通り抜けようと足を踏み出したところで、彼に手首つかを掴まれた。

「まあ、そう言わずに」

「あ、あああああの、でも……っ!!」

触れているところから熱が広がる。振り仰いで鷹之の顔を見たら、思いのほか近くて息が詰まった。鷹之は、固まったひめをその場に座らせると後ろ手で襖を閉めて、目の前に腰を下ろした。

「ひめさんは、僕が嫌いですか……?」

視線を逸そらさない鷹之の真剣な表情に、目をみはる。

「ひめさん」

鷹之に再び名前を呼ばれて、ひめは、正直な気持ち言葉をにした。

「き、らいじゃ、ない、です」

むしろ、その逆だ。

自分でも驚くぐらい、目の前の人——鷹之に心惹ひかれていた。

「そう。それは良かった」

え? と、聞き返そうとした声が一瞬で喉の奥に引っ込む。

「さ、ささささ佐倉さ……っ!!!」

急に近づいてきた彼の顔から逃げるように、ひめは後ずさった。

一瞬、きよんとした顔をした鷹之だったが、ひめの行動をとがめるでもなく、より笑顔で迫ってくる。

「なに、を……っ」

背後には漆塗りの机、そして、目の前には鷹之。今までにない状況に頭がうまく働かない。鷹之から視線は逸らしたくない、でも見つめられるのはすごく恥ずかしい。

そんなジレンマに陥りながら鷹之を見てみると、ふいに彼の手がひめの顎をすくった。声も出さず、緊張で身体を硬くしているひめに、鷹之の顔が徐々に近づいてくる。

もう、駄目。

ひめは、近づいてくる鷹之の顔をこれ以上見ることができなくなり、ぎゅっと目を瞑った。

「ひめさん」

——どくん。

耳にかかる吐息と、吐き出された自分の名前。名前を呼ばただけなのに、まるで「目を開けろ」と命令されたような気がして、ひめは恐る恐る目を開けた。視界の右端に、鷹之の綺麗そうなじが見える。そこで初めて、鷹之がひめの耳元に唇を寄せていたことを知る。

を知る。

一瞬、キスされるかと思った。

そんなことを少しでも期待した自分が恥ずかしくて、ひめは羞恥に頬を染めた。

「ひめさん」

掠れた声で名前を囁かれ、今度は身体が大きく跳ねた。

ひめは動揺しながらも逃げ道を探そうとするが、鷹之の腕が自分を囲うように背後の机に置かれているため、身動きがとれない。抱きしめられているわけじゃないのに、至近距離で感じる彼の体温はひめの鼓動をさらに速くさせた。

「恋を、しませんか？」

その甘美な声が脳内に響いて、とろりとした甘い気持ちをはひめの心に起こさせる。「恋がしたい、と恋を請えば僕を差し上げます」

もう、死んでもいい。そう思うぐらいに声だけで夢を見ているようだ。ひめは何も答えられないまま、ふるふると内から湧き上がる感情に心を揺さぶられた。

「ね？ ほくと、こいしよ？」

甘く、とろけるような気持ちを起こさせる彼の声に、ひめの思考が絡めとられる。画面やCD越しではなく、岩永ひめという個人に向けて囁かれた声の威力は、ゲームやアニメの比ではない。不特定多数ではない「自分」に向けて言われているからこそ、こん

なにも心が反応する。

優しく甘い言葉。

でも、どうしてだろう。喉がからからで声が出ない。

形作られそうになっている自分の気持ちを、今すぐにでも言葉にしたい、そう、思った瞬間。

——『ぶっさいくなお前に、その名前はお似合いだよ。——醜いイワナガヒメ』

過去、何度となく幼なじみに言われた言葉が頭をよぎる。その一言をきっかけにして次々と浮かんでは、ひめに向けられた嘲笑や、罵詈雑言の嵐。そして、侮蔑の目だった。

無理。怖い。

周りからも醜いと言われる自分が恋なんてできるわけない。しかも、こんなに素敵な男性から夢みたいな言葉をもたらえるわけがない。お姫様扱いされて、いい気になつてただけなんだ。この手を取ったらいけない、優しいこの人にも迷惑がかかってしまう。

そう思えば思うほど、ひめは泣き出しそうになる。諦めることがこんなに辛いことだなんて、知らなかった。そのとき。

「恋を請え、ひめ」

深い思考の海に落ちようとしていたひめに、有無を言わせぬ声が届く。もう一度身体がびくりと跳ねる。彼自身の容姿は普通なのに、やはり声だけで従わせる強さがそこに

はあった。ひめは、彼の声に引きずられるように、口を開ける。

「わ、たし」

「ん？」

でも、やっぱりダメ。

「さ、佐倉さんのこと、よく知りもしないで恋を請うなんてできません……っ!!!」

ひめは、両手で突っぱねるように彼の身体を押しやった。

「わ、私、佐倉さんのこと少ししか知りません。どんな性格で、どんなものが好きで、どういった趣味がおりになるのか、まったく知りません!! そんな方と恋をするのは無理です……!!」

いながら真面目だと思う。よく妹からも、頭が固いと言われていた。

それでも、今ここで流されるように「はい」と答えてしまったら、鷹之にとでも失礼な気がする。ひめは必死になって言葉を続けた。

「声だけで恋はできません。……そ、それを教えてくれたのは、佐倉さん、あなたです」

「……」

「た、確かに私はあなたの声が好きです。その声に心を奪われました。でも、恋ってそうじゃないと思うんです。……私、恋をするなら、佐倉鷹之さんと恋がしたい……っ!!!」

そこまで言って、はた、と気づく。これではまるで「告白」しているようだ、と。そこに気づいた瞬間、ひめは両手で顔を覆ってその場にうずくまった。

「ご、ごごごごめんなさいっ!!! わ、私なんかこんなこと言われても困りますよね!! あの、私が佐倉さんにふさわしくないのは十分理解しています。だから、さっきのことは聞かなかったことにしてください。むしろさっさと忘れてくださいっ! お、おかしいですもん! 今日会ったばかりなんですよ!! それなのにこんな……、佐倉さんに惹かれてる、なんて……」

もうやだ。今度ははつきり「惹かれてる」って言った。恥ずかしくて死んでしまいたい。鷹之を見ることができないのは自分の弱さなのに、鷹之の何もない反応にひどく心が怯えている。

「も、もー、やだなあっ! なんでもないですからね!! ふ、不愉快な思いをさせてしまっでごめんなさい。もう二度と佐倉さんの前に現れません! だから、……だから……」

ああ、さっと自分はおかしくなってしまったんだ。彼の声に本音だけでなく何もかもを引き出されたんだと、思うことにしよう。そうじゃなかったら、こんなこと言えない。「嫌わないでっ」

気づけば、驚く鷹之の目を見て懇願こんがんしていた。悲鳴に似た声だった。

嫌わないで、なんて自分勝手にもほどがある。子どもじみた醜態しゆうたいを晒した自分が情けなくて、悔しさで溢あふれた涙が止まらない。ひめは再び顔を両手で覆った。

「ひめさん?」

「なんですか……?」

「それは、恋がしたいと言っているようなものですよ?」

優しい声だった。ひめの不安で震えている心を全て包み込むような、優しさに満ちた声。そしてひめは、鷹之に両手をはがされ顔をのぞきこまれた。顔を真っ赤にした泣き顔は、きつとたまらなくブサイクだろう。だから顔を隠したのに、彼は平気でそれを暴く。

「僕の目を見て?」

「嫌です」

「ひめさん」

命令を含ませた鷹之の声に、ひめは抵抗するのを諦めた。素直に見つめた彼の瞳は、ひめのブサイクな顔を目の前にしているというのに、優しさで溢あふれている。

「なんで、ですか? どうして佐倉さんは私なんかと恋をしようと思うんですか……!?!」

「そんなにおかしい?」

「おかしいです!!」

即答したひめに、鷹之の瞳が見開かれる。

「絶対におかしいです。だって、こんなにブサイクでデブなんですよお……?」

「そうかなあ。僕は、ひめさんのことをそこまでブサイクだとは思わないし、……デブって言うよりもぼつちやりしてるな〜って感じるだけなんだけど……」

「そ、それ以上言ったら泣きますよ!」

「え!? 僕、そんなに酷いこと言った!」

「その逆……!!!」

顔を真っ赤にして叫んだひめを見て絶句したのは、鷹之だ。

「う、嬉しすぎて、泣きます……っ」

鷹之からの嬉しい言葉に、ひめは涙をこぼすのを懸命にこらえていた。涙で霞んだ視界では鷹之がどうしたものか、と困り果てた顔をしている。

「ねえ、ひめさん。提案があるんだけど」

「なんでしよう……?」

「お付き合い、してみない……?」

小首をかしげてひめの頭に手を置いた鷹之の行動に、ぶわり、とさらなる涙が溢れる。

「もちろん、結婚を前提に」

「ふえええっ」

泣こう。もう、泣くしかない。鷹之の手がなだめるように頭を撫でるので、その優しさで胸がいっぱいになる。

「どうかな……」

「え、つく……、でも……」

「うん。ゆっくりでいいですよ」

「……あ、の。結婚、って……、夫婦になるって、こと、ですよね……」

「そうだね」

「あの、……じゃ、じゃあ……その……」

「あえて言うならセックスも必要だね。僕も仙人じゃない、ただの男だから」

はつきり言われた単語に、頬が熱くなる。自分から言ったのに、ひめは口をぱくぱくさせて返答に困った。その様子を見ていた鷹之が、困ったように笑う。

「僕に抱かれるのが嫌……?」

「ち、ちが……っ! ぎゃ、逆です!」

「これも逆?」

「佐倉、さん、が……、私を抱きたくない……、んじゃ……」

「……」

「な、なんで見るんですか……?」

「うん、考えてる」

黙った鷹之に見つめられたひめは、着物越しに身体を視姦しかんされているような気分になった。鷹之の視線がねっとり身体に絡みつくようで、恥ずかしい。

「その逆、かな……」

「え？」

「じゃあ、こうしましょう。僕がひめさんに欲情したら結婚」

「よ、よく、じよ……っ!？」

「だから、そのときは僕がひめさんに、あなたが欲しいと請わせてください」

「え？ ……ええ!？」

「そして、ひめさんが愛を請うほど僕のことを好きになつてくれたら結婚。どうかな？」

「ほ、本気、なんですか？ 結婚を前提にお付き合いです、って」

「ひめさんが僕と結婚するのが嫌なら、やめようか？」

「い、いい嫌だなんてとんでもない……っ!!」

首を左右に振ったひめに、鷹之は笑顔を見せてくれた。同情でもない、仕方なくでもない彼の笑顔。その笑顔が、ずっとひめの求めていたもののような気がする。

「では、僕の声じゃなくて、これからは僕自身と恋をしましょう」

そう言つて、そっとひめを抱きしめる鷹之の行動に、ひめの心臓が一気に跳ね上がった。

「あ、ドキドキしてる」

「だ、だから私、こういうの慣れてない、と……」

くすくす、と鷹之がとても楽しそうに笑うので、ひめは戸惑いながらも、張り詰めていた気持ちを緩ませた。初めて男性から抱きしめられたことが嬉しくて、彼の胸元に頬をすり寄せる。

「あー。うん」

「なんですか？」

「あんまり無防備だと、困っちゃうな」

かわいくて。そう耳元で甘く囁ささかれたものだから、ひめは息を呑んだ。

「あ。まだどきってした」

「そ、そういうことを言わないでくださいっ」

口でそう言つても、思わず顔が緩んでしまう。だって、憧れの人が目の前にいて、こうして抱きしめてくれて、ひめと付き合ってくれると言う。こんな幸せなことってない。奇跡ってない。

ひとり嬉しさをかみしめていると、涙が少し乾いた頬に鷹之の手が触れる。

「それから、あまり僕の前で泣かないでもらえますか？」

触れてくる彼の手が思ったより熱くて、肩が震えた。ドキドキするのに、自分の頬に



彼の体温が移っていくのが心地いい。思わず目を閉じて手から与えられるぬくもりにうっとりしていると、耳元で囁かれる。

「僕、もっと泣かせてしまいかもしれません」  
彼はさりとそう言った。

閉じていた目を開けると、そこには極上の笑み。それを見て、彼が嘘をついていないことがわかる。何も言えず顔を真っ赤にしてうつむいたひめの顎をすくった鷹之は、ひめの頬に口づけをした。初めて感じる、柔らかな唇の感触。

「よろしく、ひめさん」

その甘ったるいコエに、思わずひめの身体がぶるりと震えた。

## 第二話 「恋」 ってどうすればいいですか？

「キスは、初めてですか？」

初めてです。そう言いたいのには、声が出ない。

ひめは、黙ってこくこくと首を縦に振って、恥ずかしくて鷹之の胸に顔を埋めた。

「なるほど」

その瞬間、着付けと一緒に綺麗に結び上げてもらった髪の毛がばらりと落ちる。お世辞にも綺麗とは言えない髪の毛は、腰まで長くなっていた。鷹之のスーツをぎゅっと掴んで羞恥に耐えていると、そっと髪に手を差し込まれる。その優しい手つきに、まるで愛撫をされているような気分になって、思わず首をすくめた。

「あ、の……？」

「はい、こっち向いて」

言うや否や、顔を上に向かせられる。

至近距離からのぞき込むように見下ろされたので、心臓が早鐘を打った。しかし鷹之はそんなひめのことなど気にせず、満足そうに笑みを浮かべると、ひめの髪を指で優し

く梳いた。

「やっぱり髪の毛下ろしたほうがいいですね。似合いますよ。あと、眼鏡。目、悪い……?」  
 「い、え……。そんなに悪くないんです。仕事とか、人に会うときだけかけてるんで」  
 「どうして?」

鷹之からの質問に、少し胸が痛んだ。

「相手の表情が、よく、……見える、から……」

上に向かせられたままだからうつむくこともできず、ひめは鷹之から視線を逸らすことで自分を保つ。

眼鏡をかけて相手の表情をよく見て発言しないと、攻撃対象になることが多々あった。どうして外見がブサイクなだけで「人でない」ような視線を男性から向けられるのだろうか。ふとした疑問と、そのときの視線を思い出して、ひめは泣きたくなった。

「ひめさん、これからデートに出かけませんか?」

そんなひめの心に、鷹之の言葉は明るい気持ちを起こさせる。不思議だ。彼の声は魔法みたいに一瞬でひめの心を明るく照らす。

「でーと……?」

「ええ。ありがたいことに僕も仕事が忙しい身なんですけど、今日は一日オフにしてもらっただんです。せっかくなので、それらしいことでもしてみませんか?」

「え、と……」

「ね、行きましょう」

鷹之はひめの手を取って立たせると、その場を後にした。

料亭を出た鷹之とひめは、エレベーターで地下駐車場に向かう。排気ガスの立ち込める駐車場で鷹之に手を引かれて、黒のBMWが停まっているところに案内された。後部座席のドアを開けてもらい車に乗ると、バックミラー越しに見えた運転手は付添人の男性だった。

「お、お邪魔します」

ひめのぎこちない挨拶に、彼は軽く頭を下げた。

「出して」

ひめの隣に乗り込んだ鷹之の声で車はゆっくりと動き出す。しばらくすると、車は地下駐車場から出て一般道を走っていた。

「まずは、その格好をどうにかしましょう」

そう言ってひめに微笑んだ鷹之は、次に運転席に向かって「いつもの場所にしよう」と声をかける。彼はそのまま視線を窓の外に向けたので、ひめも同じように外を見ようと視線を鷹之から、窓に向けた。その瞬間、左手に感じる柔らかなぬくもり。

心臓がどきん、と音をたてた。ぬくもりを感じる左手に視線を落とすと、鷹之の大き

な手がしつかりと自分の手に重ねられている。ひめは、再び激しく脈打つ心臓に呼吸困難になりながらも、車窓を眺める鷹之の横顔を見つめた。そんなひめの視線に気づいた鷹之が視線を返す。それも小首をかしげて、嬉しそうに。

そして、鷹之はひめの手をひっくり返して指を絡めるようにその手を握りしめた。「つああああ、あの……っ！」

「離さないよ」

ひめの必死な声に、鷹之は思いのほか真剣な声で答えた。

意外な反応に、ひめは彼の顔をぼかんと見つめてしまった。そんなひめのことなど気にせず、鷹之は再び窓の外に視線を移す。その横顔を見ながら、ひめは繋いでいる鷹之の手をもう片方の手で包み込んだ。

「そろそろ着きます」

そうこうしているうちに、車は目的地に到着。鷹之の手から力が抜けたのを感じたひめは、すぐに包んでいた彼の手を解放した。

地下駐車場に車が停められ、ほどなくして鷹之の座っている左側のドアが付添人によって開かれる。鷹之が車から降り、ひめも後に続こうとシートの上を移動すると、手を差し出された。車内から見上げた先には微笑みを浮かべる鷹之の姿。

「お手をどうぞ」

ひめは、おずおずと彼の手に自分の左手をのせて車を降りた。首尾よく降りて、これぞ手を繋ぐ必要はないと離そうとしたが、一瞬早く鷹之によって指を絡めるように握りこまれる。ひめは諦めて、鷹之に手を引かれるまま足を進めることにした。

地下駐車場からエレベーターに乗って、快活な音と共に目的のフロアに出る。鷹之は迷うことなく某有名ブランド店に入り、そこでひめの手を離した。

「ご無沙汰しております。佐倉様」

奥から出てきたのは、小柄で柔らかな雰囲気をもった黒スーツの女性スタッフだ。ひめも慌てて会釈を返すと、女性スタッフはにっこり微笑んで、鷹之に向き直る。

「こちらこそご無沙汰してます。岸本さん……と、今は水上さん、でしたっけ？」

鷹之のにこやかな挨拶を受け取った水上は、口元に手を当ててこころごと笑った。

「どちらでも構いませんよ。それで、本日のご用件は彼女ですか？」

「ええ。お願いできますか？」

「お任せください」

「ではひめさん。僕は少し外します。終わった頃にも迎えに来ますね」

それだけ言うと、鷹之は付添人を引き連れてさっさとその場から去って行った。呆然とその後ろ姿を眺めているひめに、背後から水上が声をかけてくる。

「本日、お客様をご担当させていただきます、水上稚架と申します。佐倉様のご要望に

お応えできるよう、腕を振りますね」

ひめは水上に向き直り、緩んでいた心に緊張を纏まとわせた。鷹たか之が懇意まことにしている店であれば、なおさら失敗できない、と気を引きしめる。

「よ、……よろしくお願ねがいします」

その言葉に微笑んだ水上は、エスコートするように店の奥へとひめを導く。

店の奥にあるアンティーク調の黒扉を水上が開けると中へ通してくれた。そこは、白を基調としたフィッティングルームだった。ふかふかの白い革ソファ、壁際には二段のハンガーラックがあり、そこにずらりと並ぶ洋服の数々。そして最もひめの興味をひいたのは、アンティーク調の大鏡だ。

「うわあ」

ダンススタジオのような壁いっぱいの大きさで、部屋の内部と一緒にひめの姿が映りこんでいる。

綺麗にそろえられた西洋の家具に囲まれた中で「和」の象徴である着物を着ているからか、そのフィッティングルームと自分が、不似合ふにがひいに見えた。まるで、今まで向けられてきた侮蔑おぼづの視線の中に晒さらされているような気持ちになって自然とうつぶいってしまう。「そのままですよいですよ。お着物、脱がしますね」

背後からかけられた水上の言葉に気持ちを切り替えると、ひめは顔を上げて極力自分

を見ないように視線を彷徨さまよわせた。鏡越しに見る水上は、ひめの背後で帯を解いている。

「お名前、うかがってもよろしいですか？」

手際よくひめの着物を脱がしていく水上の質問に、ひめは戸惑いながらも自分の名前を口にした。

「岩永ひめ、です」

あまり自分の名前を口にするのは好きじゃない。名前を言った瞬間から態度が明らかに変わる人たちを見て育ったため、名前を口にするにうんざりしていた。

「まあ、かわいらしいお名前」

けれど、水上の瞳には嘲笑の色はなく、言葉の端々から本心だということがうかがえて拍子抜けする。このような接客業をしているから、社交辞令や表情を隠すのがうまいだけかもしれない。それでもひめは、彼女からの嘲笑も侮蔑もない返答が嬉しかった。かわいらしい、なんて嘘でも言われたことがない。

「あの、でも、……名前負け、してませんか……？」

帯が綺麗に解かれ、着物に手を掛けていた水上は目をぱちくりさせた。

「名前負け、ですか……？」

「外見と……、名前が合っていないっていいですか……」

鏡越しに見る水上からの視線を、受け止められずにうつむくひめ。水上は作業を再開

させた。

「岩永様は、どう思っていらいっしやいますか？ ご自分の名前について」

—— 嫌悪の対象だ。

瞬時に胸焼けするほどの嫌悪がちりちりと心を焦がす。

「大嫌いです」

「そうでしょうね」

さらり、と肯定され、ひめは目が点になった。

「そんな顔をしていらっしやいます。失礼ですが、まるでご自分を呪っているようなお顔ですよ」

にっこり笑った水上は、脱がし終わった着物をソファの上にまとめると、襦袢じゆばんを脱いで下着姿になっているひめのそばに戻ってくる。そして、ひめの胸元を凝視した。

「まーっ。岩永様!? ブラサのサイズ、全然合ってますんつ。今すぐ合うものをお持ちしますから、少々お待ちくださいね」

そう言うと、水上は下着姿のひめを残して部屋から出ていった。

水上の言動に唾然としながら、ひめは姿見に映してみるなどない自分の身体をまじまじと眺める。

下着の上ののった無駄な贅肉。くびれがあるのかどうかも怪しくて泣けるウエスト。

たるんだ二の腕。たっぷりと脂肪のついた太もも。全体を眺めて、深いため息しか出なかった。

こんな身体のどこに欲情する要素があるというのだろう。ひめは、鷹之にこの身体を請われるなんて一生ないだろうな、と思つて肩を落とした。

「お待ちせいたしました」

戻ってきた水上は、持ってきた下着を近くのソファに置くと、「失礼します」と断りを入れてひめのブラジャーのホックを外した。

「ひゃああああっ!!」

「はい、大丈夫ですよ。怖くないですからね」

なだめるように言いながら、水上はソファの上から適当に下着をふたつ掴つかむと、ひめの背後から差し出す。差し出された色は、黒とピンクだ。

「どちらがいいですか？」

本当は、ピンクがいい。でも、選んだ服を身体に当てたときの「似合わないの」という店員の表情を見てきたひめは、水上に「どちらでも」と答えた。あの表情を見るくらいなら、選んでもらったほうが気持ちは楽だ。

「じゃあ、ピンクにしましょう」

それは、カップの裾に、気持ちばかりのレースがつけられ、茶色いボア生地ボア生地で小さな

薔薇があしらわれているかわいらしいものだった。外から見えないのなら、かわいいものを着ても誰からも文句をつけられない。だから、水上に選んでもらった下着を見たひめは、内心喜んでいた。

「本当は、ピンクがよかったですよ？」

ひめは、内心を悟られないよう心がけていたが、二言目にはそれも見破られる。

「顔に、書いてありますよ」

ふふと笑った水上は、啞然としたひめにこれ幸いとばかりに、手早くブラジャーをつけた。それから、ストラップの長さ、カップの様子を鏡越しに眺めると、水上は、白い手袋をポケットから取り出して、背後からまたひめに断りを入れる。

そして。

「っひっ!!!」

豪快にカップの中に手を突っ込んだ。思わず叫んでしまったひめの声など気にせず、水上は脇の下から胸を持ち上げるようにひめの胸をカップへ納める。

「あら。岩永様は下着をご購入されたことないんですか？」

「い、いえ、買ってまずけど、ネットで購入することが多くて……!!!」

「そうでしたか。でしたら、今度からちゃんとサイズを測って、試着してからご購入することを薦めますよ」

左右のカップの胸の納まりを確認した水上に促されて、ひめは鏡を見た。そこには、たるんでいる胸はなく、バストトップが上がっていつもより胸が綺麗に見える自分がいた。

「岩永様は肌の色が白くて綺麗なので、このピンクが映えますね。かわいらしいですよ」「あ、ありがとうございます」

褒められたことのないひめにとって、こういった褒め言葉はどう反応していいのかわからない。それでも、水上の嬉しそうな笑顔につられて、ひめは戸惑いながらも素直に感謝を述べた。

「似合う、似合わないは別として、ご自分がつけたいものを選ぶほうがずっといいです。ご自分の選択に自信を持ってください」

彼女の言葉を聞いて、ひめはまた啞然とする。水上のすごいところは、この「偏見のなさ」だろう。ちゃんと相手を見るところに、プロの仕事を感じた。

「それにしても、岩永様はずるいです」

「ずるい、ですか？」

「ええ。ブラジャーのサイズ、本来ならFの70なのに、Cの75をおつけになっているんですもの。これじゃあお胸の形が悪くなっちゃいます！」

いつの間にメジャーを取り出したのだろう、気づけばすっかりトップとアンダーを測

られていた。

「え、あ、その」

「別に怒ってるわけじゃありませんよ。もったいない！　と言ってるんです」  
よし、私の見立てどおり。

と、機嫌よくメジャーを胸元にしまった水上を見つめ、ひめは首をかしげた。

「もったいない、ない、……ですか？」

「ええ。せっかく大ききさもあって、肌の色も白くて形もいいんですから、わざと悪いようにするなんてもったいない。こんなに綺麗なお胸をしているんですもの、ぜーったいに、佐倉様は喜んでくださいますよ」

そこで鷹之の名前が出ると思っていなかったひめは、赤面した。鷹之の名前を聞くだけで、彼に抱きしめられたときの体温や、彼の匂いを思い出し身体が自然と熱くなる。

「岩永、様？」

「あの、その、これは、いえ、あの、なんでもないんですーっ！っ！！」

恥ずかしくて顔を両手で覆うと、水上はひめの様子を見て嬉しそうに笑みを深める。

「岩永様、この水上稚架に全てお任せくださいっ！　佐倉様を喜ばせる全身コーディネイトを全っ力でっ、させていただきますわっ！！」

さらに気合の入った水上は、ホルターネックの白いワンピースを取り出して、ひめに

着せた。

ワンピースは、光沢のある艶やかなシルク生地、ワンポイントとしてバスト直下に大きな黒いリボンが縫い付けられている。たっぷりと布を使用した裾には上品な黒いレースがあしらわれており、見ているだけで心が奪われるかわいさだ。さらに着心地も抜群で、バストもしっかり納まる。ひめのコンプレックスである太ももは、スカートで綺麗に隠れた。それだけでなく、女性特有の柔らかな身体のラインを強調してくれるので、太っているように見えない。

まるで自分じゃない姿に嬉しくしてくると後ろを向いたひめは、——固まった。

鏡越しに見えるのは、すごくすごく楽しそうにしている水上の笑顔。

「お似合いですよ」

「え、と、そうじゃなくてすね？　あの……！」

「でも、やっぱりホルターネックに下着は邪魔ですな。取ってしまいましょ」

再び問答無用で服の中に手を突っ込まれると、ブラジャーのホックを外され脱がされる。「いや」と言う間もない早業にひめはあんぐりと口を開けた。

鏡の中には、長い髪をひとまとめにして肩から前へ流している後ろ姿の自分。その背中——腰まで綺麗に丸見えだった。

着ている間になぜ気づかなかつたのだろう。着てからでは遅いのに。そう自分に突っ

込みを入れると、ひめはがっくりと肩を落とした。

「それにこのワンピース、カップも入っているからぼろりもなくて安心です」

楽しそうに説明する水上にひめは何も言えなかった。確かにぎっくりと開いた胸元に下着は必要ないし、カップも入っているので胸もちゃんと納まっている。

とはいえ。

「は、恥ずかしいですー！ー！ーっ!!!」

もう限界、と言うようにひめは自分の胸元を両手で隠してその場にしゃがみこんだ。

がつつり開いた胸元は豊満な胸を強調して恥ずかしいし、丸見えの背中はずーすーする。どんなに素敵なワンピースでも今のひめが受け入れるには相当ハードルの高いものだった。

「とつても、似合ってますよ?」

ひめの前で、目線を合わせるようにしゃがんだ水上がなだめるように口を開く。

「岩水様の背中はとても綺麗ですし、お胸もしっかりあるんですから、出し惜しみせずどーんと出しちゃったほうが逆にいいです。いやらしく見えませんし」

「で、でもお」

「ああっ、泣かないでください。大丈夫ですから、ね? ……ほかに、どこか気になる部分ございますか?」

「二の腕」

そう。このワンピースはホルターネックなので、二の腕が存分にさらけ出されてしまう。腹部や太ももに関しても綺麗ですし、お胸もしっかりあるので申し分ないのだが、二の腕だけはぶるぶるの肉襦袢にくじまがのぞいて、恥ずかしい。

顔を真っ赤にして涙目で訴えるひめに、水上はブラウンの七分袖のファージャケットを持ってきた。ひめが立ち上がってそれを着ると、背中と二の腕がすっぽり隠れる。

「これなら、大丈夫でしょう?」

水上の気遣いに心から感謝したひめは、ようやく気持ちを落ち着けることができた。

「わがままばかりでごめんなさい……」

「お客様のわがままにお応えするのが私のお仕事ですよ」

ぺこりと頭を下げたら、さらりと気持ちのいい笑顔で返される。その返答の仕方が実にスマートだったので、ひめは素直に「いい人だな」と思った。

「でも、これで終わりじゃないですからね」

そう言うなり、水上はラウンドトゥにコサージュが付いている黒のサテンパンプスをひめに履かせる。高さとお歩き心地が大丈夫であることを確認してから、次にヘアメイクへと移った。上質な白いソファにひめを腰掛けさせた水上は、ひめの背後に回って髪の毛に櫛を入れる。



「岩永様、がんばり屋さんでしょう？ 手荒れ、肌荒れ、眉間に皺」  
 嬉しそうにひめの髪を梳かしていた水上の声が、柔らかいもの変わった。水上からの言葉に、ひめは思わず自分の手を握り締めた。  
 「一生懸命がんばった証拠ですよ？ 自分の身を削って生きてこられたんですね……？」

「……そんなことはありません。買いかぶりすぎです」

「いいんですよ。お手入れに時間をかけられないことをコンプレックスに思わなくても。……あなたは中身が素直でかわいらしいんですから」

そんなこと、他人はもちろんのこと、家族にだって言われたことがなかった。みんな外見だけにとらわれて、誰も「岩永ひめ」を見ようとしなのが普通だった。けれど、彼女はたったこれだけの時間で「岩永ひめ」を理解しようとしている。

その努力が「仕事の一環」であったとしても、ひめには嬉しかった。

「ありがとう、ごさい、ます……」

うつむいて謝辞を述べると、水上が背後でふふふっと笑った。

「そういうところがかわいいんですから、佐倉様にたくさん理解されてくださいね」

「さ、佐倉さん、に……？」

「ええ。こうして、私にお任せするってことは、佐倉様が岩永様を理解しようとしてい

る第一歩だと思います。けっして、自分を卑下してはいけませんよ」

「で、も……」

「男性は、なにも思っていない女性にお金を使いません。……さて、と。セットどうしましょうか。アップでまとめます？ それとも……、流しちゃいます？」

「佐倉さん、が……、下ろしてるほうがいい、って……」

駄目だ。「佐倉」という名前を言うだけで意識して顔が火照ってしまふ。ひめの頬がピンク色に染まる様子を見ながら、水上は口元を緩ませた。

「かしこまりました。それでは巻きましようか。毛先だけ綺麗にパーマがかかっているみたいなので、それを生かしましょう」

水上は手早くハーフアップでお団子を作ると、残った毛先にヘアアイロンを当てていく。その間、ひめは水上との会話を思い浮かべていた。鷹之のことをひめより少なからず知っている女性からの言葉は、どれも胸にくるものがある。この人になら、今ひめが抱えている鷹之への想いを相談しても大丈夫かもしれない。ふと、そんなことを思った。

「あの、水上さん聞いてもいいですか？」

「なんででしょう？」

セットの確認をするためにひめの前に移動した水上に、ひめは渦巻く気持ち言葉を言葉にした。

「私、……佐倉さん、を……好きになってもいいんでしょうか……」  
その言葉に、一瞬驚いた表情をした水上は、メイクボックスを開けた。  
「どうしてですか？」

「佐倉さんと出会ったの、実は今日が初めてなんです。それなのに、心は彼に惹かれて……でも私、名前と外見のギャップはあるし、人に好かれることか今までなかったし、だからあの、……どうして彼が私を選んだのかわからなくて……」

「佐倉様の気持ちを、信じられないですか？」

「はい……」

「口、ちよつとだけ開けてもらえますか？」

水上の指示どおりひめは口を開けた。彼女は手元のリップブラシでピンクの口紅をとると、小指に挟んだパフをひめの顎に当てて、そつと唇の輪郭をなぞる。

「信じてみてください。佐倉様の言葉を」

「……」

「少なくとも、ここに連れてこられた時点で岩水様に希望はあります。……うちの旦那の言葉を借りるなら、覚悟がなければこれない金額のお店ですから。つと、はい、終わりました」

口紅の上からグロスを塗り終わった水上が離れていくのを感じながら、ひめは顔が青

ざめた。

「こ、ここつてそんなに高いんですか……っ!？」

目をむいて驚いたひめを見た水上は、小悪魔のような笑顔で肯定する。

「VIPのお客様をメインにご対応しておりますから。まあ、それなりに」

えへ、と悪戯いたづらっぽく笑った水上に開いた口がふさがらない。

確かにお店の雰囲気やこうした試着室以上に広い特別ルームがあるということは、そういうことなのだろう。自分には縁もゆかりもない場所だと思っただけに、顔が青ざめる。

「脱ぐとかなしですからね。もう私、完璧にコーディネートしちゃいましたから」

「で、でも……っ!!」

「岩水様、佐倉様がなぜ私にあなたを預けたのか、私は理由がわかってしまいました」  
泣きそうになっているひめに眼鏡をかけた水上は、ひめを鏡の前へ連れていく。

「これが、私の本気です」

そう言って鏡の前でひめの隣に立った水上の表情はとても誇らしげだ。

ひめは、コーディネートされた自分の姿をまじと眺めて、——啞然とした。啞然なんてもんじゃなく、驚愕だ。自分の持っていたコンプレックスが全て隠れている。

肌荒れはメイクで完璧に隠れて、CMで見るようなつるつるたまご肌。気になる二の

腕やたるんだお腹、太ももも着ているものでカバーされ、髪も天然パーマが生かされて自然な感じに仕上がっている。鏡の中の自分が、まるで自分じゃないような感覚を受けた。ただ、唯一地味な眼鏡だけが今までの「岩永ひめ」を物語っているようだった。

「コレが、答えです。…佐倉様、岩永様に、自信を持ってもらいたかったんじゃないでしょうか？」

「自信……?」

「ええ。それが、呪いをとく魔法だと私は思いますよ」

水上はそう言うが、ひめにはさっぱりだった。

今日初めて出会ったただのお見合い相手に、鷹之がここまでしてくれる理由がわからない。確かに付き合おうという話はした。でも、なんだか釈然としない。それは、水上が言うように、ひめが鷹之を「信じてない」から?」

「さ、そろそろ佐倉様がお戻りになるころですよ」

「水上さん……!」

ひめの手を取り、エスコートするように出入り口に向かおうとした水上を呼び止める。

「岩永様。これ以上は、私の口からお伝えすることはありません。不安なお気持ちはわかります。ですが、岩永様は佐倉様のことよりも、まずご自分の気持ちをしっかりと持つことが、大事じゃないでしょうか」

そう言うって、くると振り返った水上の表情は真剣だ。

「これは私の経験で恐縮ですけど、…自分の気持ちに確固たる自信が必要です。その上で、彼と向き合う。そうじゃなければ、彼の言葉や気持ちも信じることはできません。まずは、ご自分の気持ちをしっかりと持ちましょう」

「私の……?」

「佐倉様のこと、お好きなんですか?」

鷹之の名前と、すき、という言葉が並ぶだけで声が出ない。頬が熱くなって、息苦しくなって、甘い痛みが心に広がった。

「その表情を見られただけで、私は十分です」

水上はそれを最後に、ひめの手を先ほどよりも強く握り締めて歩き出した。

フィッティングルームから店内に戻り、出入り口付近で付添人と談笑している鷹之の姿を見つめる。どくん、と跳ねる心臓。そして、広がる不安。

思わず一歩後ずさりしたひめの背中を押し返したのは、水上だった。

「大丈夫。あなたは素敵です」

その言葉に、ひめは胸が震えた。

こんなにもよくしてもらって、アドバイスもいただいた。人から与えられる「優しさ」に初めて触れたひめは、この感動を返す方法を知らない。水上にどうやって感謝を伝え

たらしいのか、うつむいて考えていると愛しい人から名前を呼ばれた。

「ひめさん」

彼の姿を見つけたときよりも、ずっとずっとと心臓が大きく跳ねる。ひめはうつむいていた顔を上げた。

「さ、くら……さん……」

「そんな小さいお声じゃ、佐倉様に届きませんよ。私も行きますから一緒に参りましょう」  
水上の優しい声で胸の動悸が幾分和らいだひめは、水上と共に鷹之のもとへ足を向けた。

「佐倉様。岩永様をお連れしました」

「ありがとうございます」

微笑みを交わす水上と鷹之の前に、ひめはずっとうつむいたままだ。どうしても恥ずかしくて顔を上げることができない。せっかく水上が素敵だと言ってくれたのに、このままじゃ彼女が自分にしてくれた仕事を否定してしまうことになる。

それに、自分の素材が悪いことによって、彼女の仕事が評価されないのだけは嫌だった。  
「ひめさん。僕にも見せて」

ああ、そんな甘い声を出さないで。心臓が激しく脈打って、呼吸もままならない。どうしたらこの心臓がおさまるのか、知っている人がいたら教えてほしい。

「岩永様？」

心配している水上の声で、ひめは彼から与えられる感情に流されている自分を叱咤した。

このままじゃいけない。水上の仕事の評価がひめ次第なら、自分こそ彼女がしてくれた仕事に自信を持つべきだ。

——私は、水上さんを信じる。

何も信じることができなかった自分が、彼女を信じることで、与えられた「優しさ」を返すことができるのなら本望だ。

ひめは意を決して、顔を上げた。

鷹之はじっとひめを見下ろすと、次に視線をひめの真後ろ——水上に向ける。

何も言われなかったことに落胆したひめだったが、次の瞬間、背中に温かさを感じ、目の前にスーツが見えた。

「やってくれましたね。水上さん」

「あら、なんのことでしょうか？ 佐倉様」

鷹之と水上のいくつかのやり取りを聞いている間に、ひめはやっと自分が鷹之に抱きしめられているのだとわかった。背中に腕を回され、抱き寄せられるように鷹之の片腕の中に納まっていた。

「岩永様」

「え、あ、はい」

水上に名前を呼ばれて、鷹之の腕の中で身をよじる。

「申し訳ございませんでした。どうしても、岩永様が私の妹ふたりに似ているものですから、お支度をしている最中いろいろとお節介を焼いてしまいました。出過ぎた言動をお詫びいたします」

「そんな！ わ、私嬉しかったです！ 水上さんから、今日優しくしてもらえて！」

水上の思わぬ謝罪にひめは鷹之の腕の中から出ると、頭を下げる水上に必死に言葉をかけた。

ひめが「素材が悪くてごめんなさい」と謝罪をすることはあっても、水上が謝罪をするようなことは何ひとつない。

「だから、頭を上げてください……？ 私、嬉しかったです」

頭を上げた水上に笑顔を向けると、彼女も微笑んでくれた。ひめは、水上の前でくりと鷹之に向き直り、スカートの裾を握り締める。

「私はこのコーデインイトを気に入りました。……佐倉さんは、どうですか？」  
恥ずかしい。

自分から評価を求めることなんて、結果がわかっているからしてこなかった。でも、

今は違う。ひめが綺麗になることで「誰かのため」になるのなら、自分の恐怖なんて関係ない、そう思えた。

「うん、素敵だと思いますよ」

助けてください、呼吸ができません。

降ってきた言葉とその甘やかな声に、泣き出してしまいそうになる。

誰にも言われたことがない言葉。

切望してやまなかった言葉。

それは、紛れもなく「岩永ひめ」に向けられた賛辞だった。——人生初の。

ひめはくりりと水上に振り返って、深々と頭を下げた。

「私、初めて褒めてもらいました。水上さんのおかげです。ありがとうございます！」  
頭を上げて、困惑気味の水上に満面の笑みを向けると、水上の目にうっすらと涙が滲んだような気がした。かく言うひめも涙目だ。

「そうおっしゃっていただけで、全力で仕事をしたかいがございます」

そこで一度言葉を切った水上は、後ろに控えていた店員を呼んで、長方形の箱と紙袋一式を持ってこさせた。

「こちらはお着物です。それから、こちらの紙袋には下着と、私が選ばせていただきましたお洋服が数着入っております。どうぞこのままお持ち帰りください」

「――橋、荷物を頼みます」

橋、と呼ばれた付添人の男が水上から荷物を全て受け取る。

「あの、ごめんなさい。よろしくお願いします」

むすつとしていた橋は、ひめの言葉に一瞬眉根を寄せると「いえ」と呟いてエレベーターに向かつて行つた。橋からのそつけない態度で落ち込みそうになるひめを、鷹之の聲が現実を引き戻す。

「それでは、僕達はそろそろ失礼します。支払いはいつものようにお願いします」

「かしこまりました。楽しいひとときをお過ごしください」

ひめは、水上に視線を送るとペこりと軽く頭を下げる。それを受け取った水上は、柔らかな笑みを残して他の店員同様深々と頭を下げた。

水上のいる店を後にしたひめは、鷹之と一緒にエレベーターホールに向かう。腰に手をまわしてエスコートしてくれる鷹之にドキドキしながらエレベーターに乗り込むと、鷹之は十二階を押しした。

見上げた先には、少し困った彼の笑顔。ひめは思わず首をかしげてしまった。

「あの……?」

ひめを見下ろす鷹之が、頬にそつと手を這わせてくる。触れた瞬間、鷹之の体温が頬を伝って電流のようにひめの身体を駆け巡つた。ひめは頬を染めて視線を落とすが、顎

をすくい取られ、唇を親指で軽くなぞられた。

「この色、似合ってますね」

鷹之からの甘い声にひめが息を呑んだ瞬間、彼の指が離れる。離れていく彼の指を視線で追うと、鷹之はグロスのついたその指を、ぺろりと舐めた。唇からのぞいた舌が艶かしく動く。

「佐倉、さ……っ!!」

「ん?」

微笑む鷹之に、ひめは何も言えなかった。目を丸くして鷹之を見上げている間にエレベーターが目的の十二階に到着する。

「さ、いきましよう」

正直、心臓がもたない。

エレベーターを降りたひめは、なにがなんだかわからないまま、状況に身を任せていた。確か、鷹之が予約をしたというイタリアンのお店に入って、少し早めの夕食をとったはずだ。というの、なにを話して、なにを食べたのかまったく覚えていない。

食事中も鷹之の声に翻弄されっぱなしで、料理を味わうどころじゃなかった。ただ、鷹之の話にうんうんと頷くだけだっただけだと思ふ。彼ばかりじゃなくて自分も何かいい話題を見つければ、そう思えば思うほどひめの脳内は真っ白になっていった。

おかげで、食事が終わる頃には心の中ですっかり「ひとり反省会」を開催していた。反省なんでもんじゃない、猛省、だ。上手に話ができない自分が不甲斐なくて、悔しさでいっぱいになる。

「あの」

会計も終わり、お店を出たところで、たまりかねたひめは鷹之に声をかけた。

「どうしました?」

きょとんとした鷹之を見ながら、ひめは「がんばれ」と自分を励ます。

「おいくらでした……?」

「え?」

「私、今日こんなによくしてもらったのに、佐倉さんのお話を聞いてばかりで楽しませることができませんでした。それに、いくらお付き合いしているからといっても少々やりすぎな気が……」

そこまで言ったひめは、自分の言葉にはっとする。

付き合っって、なに?

デートって、どうしたらいい?

そもそも誰とも付き合ったことがないひめにとつて、今日かかった「費用」をどうやって受け止めるべきなのか、わからない。

## 立ち読みサンプルはここまで

「って、あの、もしかしてお付き合いしてませんか!? あ、それなら、なおさら今日かかった金額を支払わせていただきたいです……!」

混乱したひめを、鷹之がそっと抱き寄せる。

「落ち着いてください。はい、深呼吸」

鷹之の優しい声に導かれるまま素直に深呼吸すると、なんとなく気分が落ち着いていた。

「落ち着きましたか?」

「……は、はい」

真正面から鷹之に顔をのぞきこまれて、うつむく。

「そんなに恥ずかしがることないのに」

「そ、それは無理な話です……」

「まあ、それでしようねえ」

そんな会話をしながらエレベーターホールに行き、ふたりは停止したエレベーターに乗り込んだ。そのエレベーターは「上」を示しており、てっきり「下」に向かうものだと思っていたひめは首をかしげる。どこに行くのだろう?

エレベーター内には、ひめと鷹之の他に複数のカップルがいたので、ひめはどさくさに紛れて彼のスーツにしがみ付いた。嫌がられないことが嬉しくてひめが口元に笑みを浮かべていると、ほどなくしてエレベーターが停止する。